

# 年ちゃんとハーモニカ

小川未明

青空文庫



とし 年ちゃんの友だちの<sup>あいだ</sup>間で、ハーモニカを吹く<sup>ふ</sup>ことが、はやりました。はじめ、だれか一人<sup>ひとり</sup>がハーモニカを持つ<sup>も</sup>つと、みんながほしくなつて、つきから、つきへと<sup>い</sup>うふう<sup>う</sup>に、買ったのであります。けれど、みんなは、それを吹き鳴らす<sup>な</sup>ことを覚え<sup>おぼ</sup>ないうちに、やめてしまったけれど、年ちゃんだけは、べつに教わり<sup>おそ</sup>もせず<sup>ず</sup>に、いろいろの歌<sup>うた</sup>を吹けるようになりました。

「学校<sup>がっこう</sup>のことが、そういうふう<sup>う</sup>にできるといいのですけれどね。」と、お母さん<sup>かあ</sup>が、おつしやいました。

「いや、なんだつて、上手<sup>じょうず</sup>になればいいさ。年坊<sup>としぼう</sup>は、音楽家<sup>おんがくか</sup>になるかな。」と、お父さん<sup>とう</sup>は、笑<sup>わら</sup>われました。

しかし、学校<sup>がっこう</sup>のことは、ハーモニカ<sup>か</sup>のよう<sup>う</sup>には、ゆきませんでした。それだけでなく、試験<sup>しけん</sup>が近づ<sup>ちか</sup>いてきても、年ちゃん<sup>とし</sup>は、遊<sup>あそ</sup>んでばかりいるので、お母さん<sup>かあ</sup>は心配<sup>しんぱい</sup>なさいました。

「そんなに遊<sup>あそ</sup>んでいてもいいのですか？」

そうお母さん<sup>かあ</sup>にいわれると、さすがに、年ちゃん<sup>とし</sup>も心配<sup>しんぱい</sup>になるとみえて、ご本<sup>ほん</sup>を出<sup>だ</sup>し

たり、また、お姉さんや、お兄さんから算術のわからないところをきいたりして、勉強をしましたが、それも、そのときだけで、いつかまた遊んでしまったのです。

やがて、試験も終わり、いよいよ今日は、通信簿をもらうのでありました。

「どんなお点をもらつてくるでしょうか。」と、お母さんと、お姉さんは、年ちゃんの帰るのを待つていられました。

すると、なにか鼻唄をうたいながら、小さなくつの足音がして、つぎに、ご門の戸が開きました。年ちゃんが、帰つてきたのです。

「ただいま。」と、いつものように、年ちゃんは、ごあいさつをしました。

「どう？ 年ちゃん。」と顔を見るや、お姉さんが、おききになりました。

「ガア、ガア、いう声が好きこえた？」と、年ちゃんは、いいました。

「なあに、ガア、ガア、つて？」

「僕、たくさん、あひるをもらつてきたから。」と、年ちゃんは、朗らかなものです。

「まあ、乙ばつかしなの？」と、こんどは、家じゆうが、大笑いになりました。

「丙がなかつただけでも、ありがたいですよ。さあ、この通信簿をお仏壇の前におあげなさい。」と、お母さんが、おつしやいました。

「年ちゃん、きょうは、ラジオで、ハーモニカの上手な方がなさるから、よくおききなさいね。」と、お姉さんが、いわれました。

「僕、きくよ。」

やがて、その時間になると、年ちゃんは、上衣のかくしから、よごれたハンカチを出して、自分のハーモニカを拭いてちゃんとラジオの前にすわりました。みんなは、そのまじめなようすがおかしいので、くすくすと笑いました。

けれど、年ちゃんだけは、真剣でした。そのうち、ラジオのハーモニカが、はじめりました。名人だけあって、それはうまいもので、ピアノの音も出れば、バイオリンの音も出たのであります。

年ちゃんは、はじめは、それに合わせるつもりでしたが、たちまち、その元気はどこへやら消えて、しまいには、ハーモニカを吹くのをやめて、ただ、石のように、だまつたまま、下を向いてきいていました。

やつと、その、ハーモニカが、終わると、お兄さんは、

「うまいもんだな。どうだ、年ちゃん、問題にならないだろう。」と、いいました。

お姉さんまでが、

「どう？ 年ちゃん。」と、お笑いになりました。

なんといわれても、年ちゃんは、ただ、だまっています。そのようすが、いかにもしおらしくったのです。

これをごらんになった、お母さんが、

「ねえ、年ちゃんも、いんまには、ああいうように上手に吹けますね。」と、おっしゃってくださいました。

これを聞くと、年ちゃんは、急に、味方を得たというよりは、悲しくなったのでしよう。お母さんの胸にとびつくようにしてその顔をふところのあたりへ埋めました。そして、目から、ほろほろと涙を出していました。

「お母さんだけが、ほんとうに、自分を知っていてくださる。」と、年ちゃんは、強く心で叫んだのでした。

その後、お母さんが、

「さあ、おさらいをしましょう。年ちゃんは、勉強をすれば、よくできるんだから。」と、おっしゃいますと、年ちゃんは、ほんとうにそうだ。勉強をして、自分は、よくできるようにならなければならぬ、と思うのでありました。







# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 11」講談社

1977（昭和52）年9月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「ドラネコと烏」岡村商店

1936（昭和11）年12月

初出：「教育・国語教育 5巻9号」

1935（昭和10）年9月

※表題は底本では、「年《とし》ちゃんとハーモニカ」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2016年3月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 年ちゃんとハーモニカ

小川未明

2020年 7月18日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>